Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児における絵本の画像とTVの映像の認知機能の差違について、

その4、幼児のお話絵本の選択行動の解析

<くるみ幼稚園>○塩内因都代、中野富士子<広島大学>鬼谷米司
<仁方保育所>花田登日子、福岡由美子、西岡美代子

I、研究の目的と計画

絵本は、幼児の生活において、知的な習慣形成の重要な領域である。

外界と自己の確立を仲立ちするだけでなく、自己を拡張し発展させるきっかけを与えたり、拠点としての知識を与えるものでもある。

したがって、幼児教育における絵本の役割は、漠然とした心情の教育と言ったとらえ方で満足することなく、すなわち、単にその心情面の探索にとどまらず、彼らの知的な成長の側面へ迫る重要な手がかりとして、とらえるべきであろう。

そのため、幼児と絵本の関係を、幼児の行動の分析から、とらえる方法を工夫しなければならない。まず、(1) 絵本と幼児の関係はどのような形で構成されるか。(2) 絵本を取りあげた幼児は、最初にどのような行動をするか、例えば、読む行動は、どのような形式で現われるものかなどの解析からなされるべきと考えた。

「見ること」から「読むこと」への発展は、常識的に予想されることであるが、見ることは、必ずしも読むことと連続するものではない。探索的に見る。遊戯的に見る。あるいは、逃避的な活動として見ることなどもある。

遊戯的であることや、逃避的に見ることは、余程のことがないかぎり、容易に発展することはない。もちろん、「読む」と言う知的体系や価値の体系を基盤に成立する高次の活動との間には、かなりの隔たりがある。読むことは、自己を投入して、自己に新しい意味を発見する活動でもあるし、また、発見した自己を反省する作業をも、その内容としているのである。

このような抽象的、象徴的、総合的な思考活動である「読む」ことが、「見る」ことから、一足飛びに成立するものではない。こうした読みの本質が、提示される記号の抽象の度合いに応じて展開されるとすれば、幼児の絵本は、まさに、半抽象的な記号の読解と言った性格をもつわけである。

絵を外界のそれと知る段階、さらにそれらを自己の内部で結合して、新しい内容にする段階とに分けて、分析的に考察する必要がある。

II、調査対象とその方法

・対象児‥‥広島市第こくるみ幼稚園児全員（3才以上、6才以下）の300名。くるみ幼稚園児800名。

・活動分析の方法‥‥新本の200冊を、次の2様式で陳列し、子どもたちに自由に選択させる方法をとった。すなわち、従来、幼児が園で見なれている本（新本にして）と、新着の新刊絵本を混在させながら、a群は、背文字だけが見分けられるように密着形式で陳列した。b群は、表紙が見られるようにして、開架形式で提示した。

陳列室に、1～3人の幼児を誘導し、彼らの選択行動を、その行動の経路、および、選択に要した時間などについて記録し、さらに、その選択の動機や行動の意図について、教師との話合いを行い、それらの行動型を分析した。

また、a群、b群における行動類型と、借出し後の読書活動などとの関連を考察し、それらと、選択の要因との関係を、年令や先行経験の有無、思考活動の質などとの関連から分析した。

III 結果と考察

〔a群について〕

背文字によって陳列した場合、幼児の選択行動は、年令段階による差はなく、むしろ、そうした絵本に対する経験の有無や親密の度合いに依存する。すなわち、幼児は、新しい経験の絵本を選択するよりも熟知している絵本に何ら傾向を示す。

また、この場合、幼児が選択のために動き回わる回数は、一般に増加する。

〔b群について〕

表紙を見ながら選択できるように開架方式で提示すると、既知のものへ、真直ぐに進んで選択する傾向が顕著である。特に5才児では、予め自分の求めるものについての選択が優先され、接近してから、選択を変更する場合もある。しかし、多くの場合、選択を変更する者には、「読む」目的のない者や、遊びの意識の延長のままや、あるいは、既知の絵本を見つけられない者に多いようである。

a、b群を通じて、3才児は、1回の選択行動で借り出しの絵本を決定し、それは、経験のないことと関連するようである。5才児の1回で選択する傾向とは、本質的に違うようである。

NII-Electronic Library Service